

サイの御教え

一九六六年の御講話 浄化されたハート

利益。利益。人間のすべての行動において、毎日の生活の中でこの言葉が繰り返されているように見えます。穀物の山を量る時も、数字の1から数え始める代わりに利益^{ラベ}という言葉が始めています！賢者は、もつとずつと価値のある別の利益があると考えます。それは、神の前に到達すること、神というこの上ない至福に融合すること、神の至福という最高の喜びを追求することから私たちを遠ざけてしまう小さな快樂から解放されることです。

神の親族になりなさい。神の親類知己になりなさい。神の家で賃金を稼ぐ人になりたいと願ってはなりません。算定されて取り引きされるものである賃金を要求してはなりません。賃金のためになされた労働は、愛や崇敬のためになされた労働のように誠実でなく、また楽しくもありません。兄弟や息子が、自分の権利として一

日当たりいくらいくらと賃金を要求することはありません。彼らは、家の主人から、申し分なく、よく面倒を見てもらっています。彼らが要求しようがしまいが、すべてがまかなわれるのです。

アナンヤーシチンタヤントーマーム
イエージャナーハパリウパーサテー
テーシャームニッテイヤービユクターナーム
ヨーガクシエーマムヴァハーミヤハム

この確約は、ギーターの中で、主なる神によってなされているものです。——私への思いのほか何の思いも持たぬ者、誰であれいつも私への崇敬に浸っている者、私は常にその者と共にあり、今生でも来世でも、必要なものを提供する——という確約を読んで、多くの者は

こう問います。「それならば、私たちはこれやあれやの
供養^{フツヤウ}礼拝^{レイハイ}をしているのですから、その見返りに神が何を
してくれるのか見せてもらえますか」と。しかし、彼ら
はその恩寵を授けられるための条件には注意を払って
いません。

神の恩寵は計り知れない

テルグ語の詩にも、救いに来てくれない親類、背から
振り落とす馬、礼拝されても恩恵を授けない神は、捨て
るべし、と助言しているものがあります。しかし、捨て
るという行為は、「スマテイ」すなわち「良い識別心」
を持つている人々だけに許されているのだと、その詩は
述べています。もちろん、そのような人々は、前述のギー
ターの詩節に述べられているとおりの礼拝の方法を知っ
ているので、自ら求めずとも受けるに値する恩恵が授け
られます。神の恩寵は計り知れません。

神は愛であり、神のすべては愛です。神を愛として黙
想し、神の御名を愛の化身の御名として唱え、神を愛と
して崇敬すること。これは神へ至る最も容易な道です。

自分には、神聖な場所を訪れて聖者や賢人によつて聖
化された有名な神社の前で平伏するためのお金がない、
ヴェエダをマスターする時間や才能がない、だから自分
は神から遠く離れている、と思つて落胆している人たち
もいます。これはまったく間違つています。というのは、
神はそうした外的な達成の程度で恩寵を量り分けること
はないからです。神は量には動かされません。餓えを満
たすのに、世界のすべての穀倉地帯の穀物が必要なわけ
ではありません。一つかみで十分です。喉の渴きを癒す
のに、すべての川の水を求めする必要はありません。コッ
プ一杯の水で十分です。それと同じように、絶えること
なき神の恩寵を得るには、小さな一つの全託の行為で十
分です。何年にもわたる苦行や学びや靈性修行^{サダナ}が要求さ
れているわけではありません。「あなただけ、他には何
もありません」——このことを心に留め、その信念を持っ
て生きなさい。それは、あなたのすべての行いを、計り
知れないほど有益な礼拝へと変えるでしょう。

全託の精神で為された行いは ヤグニヤとなる

アルジュナは、主クリシュナから、年長者や親類と戦うように言い渡されました。アルジュナの英雄的な血統と武人階級の血が自らを戦いに駆り立て、罪と報復への恐れが自らに戦いを止めるよう促しました。「私は自分が崇敬し、親愛を抱いている人たちを倒してまでも、勝利を収めてこの王国を統治すべきなのだろうか？」とアル

ジュナは自問しました。すると、主は敵軍らの真ん中でアルジュナに教示しました。ギーターの第二章で、クリシュナはアルジュナに全託のことを話しています。アルジュナはそれを聞いて、「主よ、私に自分の意志はありません。私はあなたに全託します」と言いました。そして、戦いはヤグニヤ「供犠」へと変じ、アダルマ「ダルマでないこと」が供犠の火に投げられました。

主なる神への全託の精神で為された行いはヤグニヤになります。エゴの精神で為された行いは戦いとなつて終わります。皇帝ダクシヤはヤグニヤを執り行いましたが、慢心により、主と主の力を軽視しました。そのため、ヤグニヤは戦いによって台無しになりました。戦いを汚すエゴがない時には、戦いはヤグニヤへと昇華します。

これは全託が達成し得る秘法です。

まず、「私は神の道具である」(ダーソーハム)という自己確信を得ることです。それから、神の恩寵を獲得することによって、「私はシヴァ神である」(シヴォーハム)、あるいは、「私は神である」(ソーハム)という認識が、あなたの揺るぎのない経験となるでしょう。

世界のすべてに至高神が内在している(サルヴァム ヴィシュヌマヤムジャガト)というこの崇高な事実を把握するための最初の道は、バクテイ(信愛)です。なぜなら、信愛が強まると、通常、人は信愛によってすべてのものの中に自分の崇める神の姿を見るからです。

「私の実体と宇宙の実体は同一である」という不二一元論の概念を理解するのは難しいことです。「私は神である」ということは、鋭い知性と明瞭な識別心を通してのみ認識することができものです。これは外的な議論や努力によって意識の中に確立できるものではありません。瞑想と探求の熟練者になる必要があります。

あるとき、よそから来た僧侶が裕福な領主の病気を、「これは目に問題がある」と診断して、一つの色だけを見るようにと助言しました。領主は、入手可能なすべて

のペンキと、その地域のすべてのペンキ屋をかき集め、壁、屋根、塀、道、木の幹、すべてのものを緑色に塗りました。何ヶ月かしてその街に戻ってきた僧侶は、緑一色になった奇妙な外観を見て驚きました。領主にその理由を尋ねると、主人は僧侶の処方に従ってそうしたのだと言いました！僧侶は、そんな厄介なことをしてお金を使い果たしてしまつた領主をたしなめました。なぜなら、緑色の眼鏡をかければ同じ効果を得ることができたからです！視覚が浄化されてブラフマタットワ「ブラフマンの原理」を帯びると、すべてが一つの基礎であるブラフマンとして見えるようになります。いくら外的な苦行を積んでも、儀式のための正装をしても、その確信を得ることはできません。

真実で役に立つ言葉を話しなさい

基礎であるブラフマンの唯一性は、すべての人を等しくさせます。この平等観は、高いレベルの経験においてのみ現すことができます。その段階に至らなければ、すべての人をお互いに等しく扱うべしなどという話をして

も、自分を欺いていることとなります。なぜなら、そうした単純なことでさえ、真実を話すという点において信用を危うくすることになってしまうからです。ギーターは、「アヌドウエーガラムヴァーキヤムサツティヤムプリヤヒタム」「人を傷つけず、真実で、好ましく、有益な言葉」を話すようにと、忠告しています。

パーンダヴァ兄弟と短気な聖賢ドウルヴァーサに関する話があります。クルクシェートラの戦いの終わりに、アシュワッターマが巡礼から戻り、パーンダヴァ兄弟が勝利したことを知った時、自分の手で戦勝者を皆殺しにしようと誓い、彼らを探しにきました。クリシュナは、死をもたらずその強力な男の怒りからパーンダヴァ兄弟を救いたいと思いました。クリシュナはドウルヴァーサ仙のもとに行き、兄弟たちをどこかにかくまつてほしいと頼みました。ドウルヴァーサ仙は同意しましたが、条件を一つ出しました。もしアシュワッターマが兄弟たちの居場所を尋ねてきたら、真実を話してもよいとする、しかし怒った口調で話す、それで事足りる、と。そこで、五兄弟はドウルヴァーサ仙が静かに瞑想に座る洞窟の中に隠れました。

神は行為の裏にある動機の清らかさを見る

アシユワッターマは、ドウルヴァアーサ仙を見ると、緊張した足取りで心臓をドキドキさせながら、思い切つて彼の瞑想を妨げました。（これまでドウルヴァアーサ仙は怒るといつも恐ろしい呪いを吐いて多くの人を亡き者としてきた）。そして、恐れで躊躇ちゆうちよしつづ、パーンダヴァ兄弟がどこかこの近くにいないかと尋ねました。ドウルヴァアーサ仙は、しばらくの間、黙つたままでした。突如、雷光と共に雷鳴が響き、ドウルヴァアーサ仙は叫びました。「どこにいますかと思うのだ？ 彼らはここにいます！」その口調は瞑想を邪魔された怒りと恨みに満ち、その顔は今にも呪いが喉まで出かかっていることを示していました。アシユワッターマはとてもその場に留まつてはいられませんでした。アシユワッターマは、「彼らはここにいます」という言葉を、「おまえはここで何を探しているのだ？ もし彼らがここにいたら、おまえはどうしようというのだ？」という意味だと思つたのです。外側を見るだけで真実を判断することはできません。

スダーマ「クチェーラ」も、同じような窮地に陥つたことがあります。ドワーラカへ行つて幼少時代の親友であるクリシュナに家族を養うための物質的な援助をしてくれるよう懇願してくるようにと妻に言われた時、スダーマはそれが上手くいくか不安に思いました。なぜなら、スダーマは外側、つまり、王の砦、宮殿、護衛、道具一式に注意を向けていたからです。スダーマはそれらと自分の身なりや見てくれ、自分が持参するクリシュナへの供物のお粗末さを比べていたのです。神が見ているのは行為の裏にある動機の清らかさであり、華麗さや見栄えではありません。

人間の最たる無知

真のバクティは、内側の意識こそが重要であり、外的な振る舞いは重要ではありません。自分を縛り付けている世俗的なしがらみによって、神への信愛が限定され、形作られてしまつていると訴える人たちがいます。彼らを縛り付けているのは、この世ではありません。彼らをこの世に縛り付けているのは、彼ら自身です！

人々は、猿を捕まえるのに、口の小さな瓶にピーナツを入れて庭に置きます。近くでこつそりと待っている、猿がやって来て、瓶の中に両手を入れて、つかめるだけピーナツを握ります。それから、猿は、自分は手にたくさんのピーナツを握っているので、瓶から手が抜けないことに気づきます。瓶の口が狭すぎて握りこぶしが通らないからです。こんなどうしようもない状況の中では、いとも簡単に猿を捕まえることができるのです。こうして猿は、罠を仕掛けた人たちに捕獲されます。ピーナツを手離しさえすれば、猿は瓶という重荷から逃れて自由になれます。ピーナツへの執着が猿に災難をもたらすことになるのです。

これと同じように、人間も五感の対象物に執着し、それらを手放す気がないために、自分がこの世にやって来た目的を忘れて、この世でがんじがらめになっているのです。これは無知の最たるものです。あなた方は、自分に割り当てられた時間を最大限に活用するよう努めなければいけません。

あなたは生まれる前には何だったのか、生まれた後、死んだ後には何になるのかを知ろうとすることはありま

せん。陶器職人は、器を作るのに土を掘ります。そうすると、そこは穴になりますが、家の前には土が山積みになります。その土はろくろでの過程を経て、器になります。その器が割れてバラバラになると、それはまた土になります。器の寿命は短く、それゆえ、それはジーヴァ、すなわち個人を象徴しています。土は、ブラフマン、実体であり、それはすべての創造物の基盤をなしています。このことを知り、絶対実在の中に落ち着きなさい。

一九六六年（月日不明）

Sathyva Sai Speaks Vol.6 C45